ヘルダーの「パラミュティエン」

前田利道

ドイツ古典文学の時代を顧みるとき、ゲーテ、シラーなどの諸高峯は、當時においてすでに、全ヨーロッパを俯瞰し得たことを知るのである。小邦分立の後進國たる當代ドイツの、崩壞に瀕した封建制の下にあつて、荒れはてた思想、文化の原野から、文学のみならず哲学、音樂等の分野においても、世界の先進國の諸天才に比肩しうる人々の出現を見たことは、このような國土に生れ得た思想、文化の内容と共に、同じく後れて進みつつあるこの國の文化との對照においても、われわれの興味をひき、またわれわれに深い教訓を與えるのである。

それら當代の諸高峯のうちに、もう一つの巨峯ヘルダーをみることができる。しかし、かれの姿は他の人々とは何と異つた外觀を呈していることだろう。

「むかし一人の偉大な、しかし同時に深く不幸な男がいた。かれは一八〇三年の十二月十八日ヴイマルでその兩眼を永遠の安靜のために閉じた。」

K・ハイネマンは、そのドイツ文学史のヘルダーの項を右のような文章で始めている。ヘルダーは不幸な男であつ

たといえよう。低い階級に生れ、生活との言語に絶したたたかいをしながら、缺乏のうちに成長したかれは、生涯その不幸から逃れられず、豊かな理念の世界を胸にたたえ、世間に認められるようになつてからも、かれと家族との生存をおびやかさないだけの收入を得るという、ささやかな望みも思うにまかせなかつたのだから。

しかし、かれの不幸はそればかりではなかつた。思想の世界においてかれに與えられた處遇こそ、最もかれを不幸にしたと言えるだろう。

若い時からヘルダーは、荒れた思想の原野、文化の庭を辛苦しつつ切り拓いた。その耕した土地には、ゲーテをはじめあらゆる文人、哲人のみのりを生んだが、かれ自身の得たものとては、開拓者の額に刻まれた勞苦の皺だけだといつてもよかつたのである。

ヘルダーは、創作家というよりも、むしろ勃興しようとするドイツ市民階級の先驅的思想家、ドイツ文学の正しい水先案内として高い價値を示した。いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラングの生みの親として、ルソウ、スピノザに深く參じ、リベラリストの立場からホメーロス、シェークスピアの中に文学の核心を見出し、フランス文学の惡影響下にあつたドイツ文学を正道に導いた。かれは、特定の歴史的民族的地盤の上に生生と生長したものとして國民文化や言語、美術や文学を理解した。批評家として、文化史研究家として、牧師として、スピノザを基礎とした獨自の哲学――それは近來唯物論的、辨證法的思惟の先驅として重視せられるに至つた――の提唱者、聖書の價値の新發見者、外國精神文化のドイツへの仲介者として、そのドイツ精神運動への影響は廣大で且つ深刻であつた。

しかしかれは、ほとんど文学作品を創らなかつたことによつて文学史から、哲学の體系的著述のなかつたことによつて、また當代の主流たる觀念論哲学と鋭く對立していたことによつて哲学史から、全く不當な取扱いをうけることになつた。（かれの主要な著作を擧げてみると、「近代ドイツ文学論斷片」（一七六七）、「批評の森」（一七六九）、

「言語の起源」（一七七二）、「ドイツ様式と美術」（ゲーテと共著、一七七三）、「人類最古の原典」（一七七四――七六）、「人類形成への歴史哲学」（一七七四）、「彫刻論」（一七七八）、「ヘブライの詩の精神」（一七八二以降）、「神論」（一七八七）、「人類歴史哲学の諸理念」（四巻、一七八四――九一）、「アドラステア」（雑誌、ヘルダー編輯、ほとんど單獨執筆、六巻、一八〇一――〇三）、民謡の蒐集（一七七八年以降印刷。一八〇八年に遺著として「歌謡における諸民族の聲」）、「Der Cid」（スペイン語からの物語詩集、一八〇三）、ズファン版全集（三十三巻、一八七七――一九一三）等、ということになる。）

しかし同時代者やその後の時代が拒んで來た正當な評價を、後世が與えるという慰めは、ヘルダーのために殘されている。その皮切りは一九三〇年パウル・ライマンによつて、世界觀の分野で行われた。ライマンは、從來の古典文学史は「傳説」と偏見に滿ちたものであるとして、その徹底的な書替えを要求し、ドイツ古典文学史の根柢にあるものとしてヘルダーの世界觀を高く評價した。かれは又、ヘルダーをはじめその時代に屬する人々の作品から書翰に至るまでの一切の讀み直しを後代の任務として要求したのである。その後、ドイツ國にも長い期間の不幸な狀態が續き、この國でも同斷であつた。しかしライマンの主張に沿つた研究も、世界各方面でたゆみなく續けられ、この國においても、成果こそ未だ少いが、ヘルダーの作品や書翰を味讀することが續けられている。（たとえば「ドイツ文学」一九五二年八號、大山聰氏の論文をみよ）。ヘルダーの卓越した點が深い根據をもつて正しい評價を得、かれの「不幸」がその眞の根柢において捉えられる日は益々近いであろう。

＊

ヘルダー再發掘の焦點は、もちろん、かれのカントに向けられた鋭い觀念論攻擊を中心とするその哲学、生前發表することのできなかつた「初稿人文書翰」の根本思想――フランス革命によつて激發されたかれのヒュマニティー論の

眞髓――等に向けらるべきものであろうが、いまはヘルダー理解のためのささやかな一寄與として、その「パラミュティエン」の拙譯を呈示することを以つて滿足したい。これはかれの數少い「創作」の一つであり、レッシングの寓話が數度に亘つてこの國に紹介されているのに比して、不當にも、ほとんどかえりみられなかつたものだからである。

「パラミュティエン」Paramythien は、ヘルダーのもう一つの作「パラーベルン」Parabeln および對話篇「イドゥナ、あるいは若返りの林檎」Iduna, oder der Apfel der Verjüngung と一連の共通性を有しており、かれがドイツ文学の開拓者として、その素材を過去の、それぞれギリシャ傳說、ユダヤ傳說、北方神話にまでも擴大すべきことを、またその取扱いは如何にすべきかを、實踐や論文で示したものである。すなわち「イドゥナ」は一七九六年シラーの「ホーレン」に載せられた北方神話誌に關する對話體の論文で、「パラミュティエン」はギリシャ傳說から、「パラーベルン」はユダヤ傳說から材料をとつた散文詩である。この後の二つは、あまり數多くないヘルダーの創作のうちでも、美しく貴重なものと考えられる。これらのものは、ヘルダーの偏見のない多方面さ、かれの青年時代の見解と後年の活動との連關を示す有力な根據となるものである。いま、J・マチアスの所說などを參考にしながら、この三つの作品の成り立ちと意義とをすこしくふりかえつてみたい。

ヘルダーは早くもそのリガ時代（一七六四年以降）から、マレー Mallet の一七五六年の佛譯によつて「エッダ」を知つていた。フランス旅行の際にもこれをたずさえ、シュトラースブルクでは深くこれを研究して魅力を感じた。その「オシアンおよび古代諸民族の歌謠に關する往復書翰」のなかでは、「エッダ」の英雄の力を賞讃した。ヴイマル時代の初期には、それから新譯した數篇を「民謠集」のなかに發表、さらに一七九一年には「人類歷史哲学の諸理念」の第四部でこれに言及している。それ故、かれが「イドゥナ」の對話のなかで、ドイツ人は、眞正なドイツの基本言語でチュートン民族のもとに保たれている北方神話誌に親炙して、その精神のうちでドイツ人に役立つものを、ド

イツ人自身を若返らせつつ、わがものとしなければならぬと要求したとしても、かれとしては、なんら事新らしい所説ではなかつた。かれはドイツ國民意識が若返り強化することのできる一源泉を、この神話誌から拓こうとしたのである。だがそれは、ゲルステンベルクやクロップシュトックのような人人、あるいはその亞流の試みたような虚構や遊びの態度ではできない。それは天才の仕事であり、この獨自の世界へ愛情深く沈潜するひとびとのみにできることである。かれは、かつて民謡やイギリスの物語詩、オシアンやシェークスピアへの沈潜を鼓舞して、ゲーテやビュルガーの天才に道を拓いたように、北方神話誌の世界においても、將來の天才のために坦坦たる路を拓こうとした。例によつてかれの準備は周到をきわめた。かれは最新の研究に從つて、ドイツならびに當の北方の諸学者のほとんど完全な知識をわがものとし、それらの最も重要な人人の主著をみずから精査した。かくて、かれの蒔いた種子は各方面に開花した。ドイツ傳説研究の建設者といつても過言でないヴィルヘルム・グリムは、ヘルダーとは直接の關係はなかつたが、かれがデンマークの英雄詩や「エッダ」を研究し、童話や英雄傳説を研究する際に、ヘルダーからうけた刺戟に感謝し、この研究領域におけるヘルダーの功績を稱えている。雜誌「Bragur」の編集人でヘルダーの信奉者だつたグレーターは、ヘルダーの散布した種子をロマン派文学とドイツ古代学の畠に搬びこんだが、とくにジムロックとリヒャルト・ヴーグナーとの文学の庭園では、イドゥナの林檎はその若返りの力を、ヘルダーの豫想し得た以上にすばらしく確證した。

ギリシャ神話誌とユダヤ神話誌は、ヘルダーがつねに徹底的に通曉し愛好していた兩分野であつたが、このばあいには、その若返りをみずから試みた。ギリシャ神話誌の模範的なことは、かれがすでに「斷片」の第三集で賞讃したところで、この神話誌に和やかな變形を加えて、「發見や同じような素材に滿ち充ちているわれわれの新しい世界へ」これを適用することを薦めたのである。レッシングの寓話、たとえば「ツォイスと馬」、「ろば」、「ツォイスと羊」

および「山羊」のようなもの、ゲルステンベルクの「戯作 Tändeleien」のなかの、たとえば接吻や女怪ジレーネや鬚などの起源についての詩は、如何にして古代の神話誌から、「觀察や發見や出來事などを詩的に實らしく、詩的に美しく說明」できるかということにたいして、かれに刺戟を與え、最初の實例を示した。かれはラムラー Ramler を讀んで、「新しい出來事を古いものに歸せしめ、これに古いものの衣を着せ、それが品位や富、威儀や魅力をもつようにする」ことにラムラーの成功を認めた。「斷片」によれば、一般に、「新しいものが尊嚴になり、古いものが若返る」ように、「新しい時代とその風習から」「古代神話誌に新しい特徴を」つけ加えることができる。あるいはまた、「哲學的詩人は」「古い寓話に魅力がでるように、それにより知的な意味を與え、新しい詩的な意味をそれに吹きこむ」べきだという。ヘルダーは早くから右のような趣旨でみずから創作を試み、最初は、素材も形式もゲルステンベルクに從つていたが、後にはレッシングの所說に同感を示し、レッシング的な散文形式を採るに至つた。最初の發表は一七八一年、回覽誌「Journal von Tiefurt」で行われた。これはヴイマルの大后アマーリアの主唱で發行されたものであつた。さらにそれは、一七八五年には數を加えて「散亂した諸葉」の「第一集」のなかで「パラミュティエン」の名の下に印刷された。

一七八七年には、さらに第三集に「太古の諸葉、近東傳說からの作品」が載り、一八〇二年には「アドラステア」の第七集に「ユダヤのパラーベルン」が載つた。前者はむしろ牧歌的、傳說的であり、後者は教訓的、比喩的である。この兩者は、「パラミュティエン」がギリシヤ神學の精神を保持している以上に忠實に、ヘブライの傳統とユダヤ律法學の精神を保持しているとはいえ、「パラミュティエン」と全く質を同じくして、ほとんど自由な作詩であつて、せいぜいその主題を聖書の部分あるいはヘブライの聖書註釋者の註解から採つたに過ぎないのである。また、「パラミュティエン」の成立にレッシングの刺戟があずかつているように、「ユダヤのパラーベルン」にはレッシングの友人モゼ

ス・メンデルスゾーンの示唆があつた。そして後者の素材は「ヘブライの詩の精神」を書くための研究をしている際に集つた。

こうして、パラーベルンとパラミュティエンとは、ヘルダーの獨創的な詩となつた。かれのパラーベル文学は後にしばしば模倣せられている。たとえば、Karl Stöber, Emanuel Fröhlich, Berthold Auerbach, Ludwig Aurbacher のような人人である。

「パラミュティエン」は、たしかにそれ以上の効果を收めた。一七八四年のこと、この原稿を讀んだ際に、クネーベル、ゲーテ、フラウ・フォン・シュタインらは、その香り高い創造の姿に、はげしい喜びを感じた。それの發表された後には、この喜びは廣く一般的なものとなり、ヘルダーは、主として「パラミュティエン」のために、一七九一年に「散亂した諸葉」の「第一集」の新版を計畫しなければならなかつたほどである。特にロマン派は神話の童話というジャヌルを發展させ、ノヴァーリスは「夜の讃歌」や「オフターディンゲン」で詩的に、フリードリヒ・シュレーゲルは理論的に、シェリングは科学的な自然哲学の衣裝に、これを用いた。しかし、もちろん、そのいずれも、ヘルダーの模範の、眞にびようびようたる優美さに及ぶものはなかつた。

*

「パラミュティエン」譯出に際しては、神名等は概ねこれをドイツ讀みにしたが、その長音は、日本語の間に在つてはわずらわしいだけだから、大抵のばあいにこれを無視した。

パラミュティエン

—ギリシャの寓話からの散文詩—

＊

「散亂した諸葉」への序文から
第一集、第一版、ゴタ、一七八五年。

デモドル。それから何なんです。

テアノ。花花[1]と共にわたしを最も樂ませてくれたもの、パラミュティエンです。この言葉はどういう意味ですか。

（1）「散亂した諸葉」の「第一集」においては、第四部にある「パラミュティエン」に先行して第一部に「ギリシャの花譜からの花花」と題するギリシャのエピグラムの模倣詩がある。

デモドル。パラミュティオンとは氣晴しのことです。ギュイの語[1]つているところでは、なお今日のギリシャ婦人は、かれらがひまつぶしに讀む物語や詩をパラミュティエンと呼んでいます。わたしのものには、なお第三の根據からこの名を與えることができました。それらはミュトスとよばれる古いギリシャの寓話に基いており、その經過のなかにただ一つの新しい意味をさしはさむものだからです。

（1）佛人M.Guysの一七七六年の著書のなかに、「ギリシャのコント、あるいはパラミュティア」がある。

テアノ。美しいものにつけた美しい名ですね。というのはね、デモドル、わたしはあらゆる陳腐な、あまりにもしばしば用いられる神話誌の童話が、すくなくとも新しい意圖をもつてふたたびあらわれるのを見たいと願つているからです。そうです、もしもわたしが、わたしの廻りのすべての美しい對象を、古代の詩で、いわば變化させ、新鮮によみがえらせることができたら、好もしいことでしよう。

デモドル。やつてごらんなさい、テアノ、そうすればあなたは、ここに試みられたものとは比べることのできぬほど美しいものを生み出すでしよう。これらのものがどうしてつくり出されたか、ごぞんじですか。二三度の散歩の途上での對抗遊戯によつてです。[1]

テアノ。あなたは花の仲間の話を續けておられるよ

うに見えますね。

（1）「散亂した諸葉」の「第一集」に「序に代えて」前文となつている「對話」のなかで、第一篇、第二篇を論じた後に、進んで、この集の第三篇のための内容紹介は、次のように始まる。

デモドル。だが續けて下さい。まだあなたには全文庫の貯えがあるわけですから。

テアノ。「音樂か繪畫か、どちらがより大きな影響を與えるか。神神の會話。」それについてのお話。

デモドル。それは今度は童話のように聞えるでしょう。むかし、むかし、あるとき花の仲間がありました。——

テアノ。それではプロヴァンス人の時代の童話なのですね。

デモドル。おそらく。——それで、この花の仲間では、ありとあらゆる精神の遊戯が行われ、なかんずく質問が課せられました。この問題は出されたものの一つで、わたしは賞を得ようと努めたわけです。

デモドル。ほぼ同様です。二人の世捨人が、かれらの二三度の散歩の途上、たがいに主題を課して、それについての寓話や詩、そのほか何でも思いついたことをいうことにしました。わたしはその世捨人の一人で、話されたことを起草し、こうしてこれらの物語ができました。二三のものには、なお競技の跡を發見なさるでしょう。

テアノ。だれにでも成功するという遊戯ではありませんね。

デモドル。あなたにはきつと成功しますよ。そしてわたしはすでに、あなたのお好みの主題の二三について、より美しいパラミュティエンを期待しています。魂はこのような遊戯において最も心地よく作詩するものです。そしてわたしは、すでにレッシングがイソップの寓話のばあいに言つたように、ひとがそのなかで子供たちをも訓練することを望みたいのです。古い神話誌は、この變化によつて、かれらの好むものとなるでしょう。かれらの感受力は鋭くなります、そしてわたしは、あらゆる對象をまだ初初しい新鮮な愛で眺める自然の寵兒の魂から、ときおり素朴な思想が、愛らしい小さな蕾のように萠え出る實例をもつています。テアノ、あなたはこの小供らしい單純さが好きなのだから、ほかの時機に、それらの二三をあなたにお傳えしましょう。

テアノ。そしてわたしは、いくつかの對象を若若しく畫くために、わたしでもまだ子供になれるかどうか、やつてみたいと思います。たとえ、それほど華麗ではないにしても——

デモドル。華麗さはこのばあいには對象に屬するもの

でしよう。そうでなければ、それは失敗というべきでしよう。あなたの詩が美しければ美しいほど、それは飾りを必要としないのです。あなたはあのギリシャのエピグラムを知つていますね。

なれはうるわし、アグラヤよ、四方のものみな、ながためにうるわし、
裝い飾りて美しけれど、露なるとき、なれは美の權化。

＊

「散亂した諸葉」への前言から

第一集、第二版、ゴタ、一七九一年。

パラミュティエンは古代の神話誌を混亂させようとするものでもなければ、時勢遲れの模倣を促進させようとするものでもない。そのやりかたに從えば、それは神話の牧歌あるいは寓話、自然の諸對象に關する詩なのであつて、パラミュティエンの名がなくても、すでに同じものの數數は、われわれの言葉のなかに存在するのである。古代人自身によつても、神話誌は、英雄史詩と寸鐵詩の形で、悲歌、頌歌、牧歌、および合唱歌の形で、パラミュティエンに適用されたのである。そのほかにまたどうしてそれが詩文に有益になりうるだろうか。言い廻しそのものにおいても、それは、輕妙な、多くの變化が可能な比喩としてとりあつかわれねばならぬと思われる。その衣裳は、天衣のように微妙である。

＊

曙光

たのしげな少女たちの一群れが、舞い踊り讃歌をうたつて、（曙の女神）アウロラの祝典を擧行していた。「いとうるわしき、至福なる女神よ、」とかの女らはうたつた、「みましこそはばらの姿、永遠なる青春の美を湛う。日日あらたなる朝に目ざめ、享樂の泉に浴び、爽快の百花に浸る。」――あたかもそのとき、太陽が昇つたので、アウロラは、その駿馬を御し少女たちのところに來て、目の前に立つた、女神たちのうちで最も美しいが、最も幸福だとはいえない女神が。かの女の目には涙があつた、そして、地上から引いて上つてきた面紗の靄は、濕つた雲のように女神の輝くばらの顏ばせの前にかかつていた。

「子らよ、」と女神は語つた、「讃歌をもつてわたしを敬つてくれたおまえたちの、無邪氣さにひかれてきました、わたしのありのままの姿をみせるために。わたしが美しいかどうか、その目でみておくれ。わたしが幸福かどうか、涙が語つてくれるでしょう、わたしは毎日妹の（花の女神）フロラの膝にこの涙をながしているのです。輕率にも若いとき、わたしはあの老いたティトヌス[1]と結婚しました、この人の腕のなかからわたしが毎日朝早く急ぎ上つてくるのは、おまえたちが見る通りです。この人とわたしとへの刑罰として、青春のない不死がこの人にあたえられ、わたしがこの人のもとにいるかぎり、そのことがわたしからも光輝と美とを奪うのです。ですからわたしは、このように朝早く、影を追いはらうわたしの短い仕事に急ぎ、晝中は太陽の光のうちにかくれます、そして、ついにまた、この人に見つけられ、涙をながし赤面しながら、その陰氣なベッドに引き下ろされるのです。おまえら少女は、わたしの實例を鏡となさい、そして、美しいと同じくらい賢くて、幸にもじぶんにひとしい御亭主を選ぶというのならかくべつ、おまえらのうちの一ばん美しい子が、必ず一ばんしあわせであるにちがいないなどと考えてはいけません。」

（1）ティトヌスは、ギリシャの傳説によると、トロヤ王ラオメドンの息子でエオス（ローマ名はアウロラ）の愛人である。エオスはかれを誘拐し、かれのためにツォイスから不死を乞い得た。

アウロラは姿を消した。しかしその後ひきつづき、少女らにたいしては、朝露の涙の雫一つ一つのなかに、女神の姿はふたたび輝き出たのであつた。少女らは、この女神が最も美しいからといつて、最も幸福な女神として讃えることは、もはやしなかつた、かくて、女神の實例によつて賢明になつたのである。

＊

眠り

ユピターが、その支配下にある人間たちの、勞苦に滿ちた生涯の短い期間を幸福にし樂しませるために創りだした、數かぎりない守護神の群のなかに、暗黑の眠りもいた。かれは、じぶんの姿を眺めたときに言つた、「わたしの輝かしく愛嬌ぶかい兄弟たちに交つて、わたしに何をせよと言われるのですか。諧謔や歡喜と仲間になり、（戀愛の神）アモルのあらゆる手管のなかにあつて、

わたしは何と悲しげな外觀をしていることでしよう。わたしが憂いの重荷をとり除いてやり、穩やかな忘却をのませてやる不幸な人人の願いに、わたしがかなつているというのかもしれません。わたしが疲れた人の氣にいるというのかもしれません、もつとも、わたしはその人を元氣づけて、やはりまた辛苦な新しい勞働に向けるに過ぎないのですが。けれども、かつて疲れを知らぬ人人、不幸の苦しみを味わつたことのない人人にとつては、わたしは、つねにその喜びの循環をさまたげるものにほかならないのです――」

「おまえはまちがつている、」と守護神と人間との父は言つた、「おまえの暗黑の姿のままに、おまえは世にもいと愛すべき守護神となろう。何故となら、諧謔や歡喜も倦み疲らすということをおまえは思わないのか。まことに、かれらは憂いや悲しみよりも早く倦み疲らせ、飽滿した幸福者にとつては、いとも退屈な怠惰に變ずるのだ。」

「しかしおまえをも」とかれは言葉をつぎけた、「快樂なしに置きたくない。いや、快樂という點では、しばしばおまえの兄弟たちの全群にもたちまさるようにしたい。」こういつて、かれは眠りに、銀鼠色の、優美な夢の角盃を手渡した。「この盃から、」とかれは言つた、「おまえのまどろみの酒をふり注ぐがよい、さすれば、幸せな連中も、不幸な人人も、ともどもに、おまえの兄弟のだれよりもおまえを願望し愛するだろう。盃のなかにある希望や諧謔や歡喜は、おまえの姉妹（優美の三女神）グラツィエたちの魅惑の手によつて、われわれの天國の野から集められたものだ。それらの上に輝く澄明な天の露は、おまえが幸せにしようと思うすべてのものに、願望の爽氣をあたえる。またそれらには、愛の女神が、われわれの不死の神酒をふり注いでおいたから、その歡喜の力は、死すべき人間たちにとつては、地上の貧しい現實があたえる一切のものよりも、すぐれて優美精良なものとなろう。最も盛んな諧謔や歡喜の群からさえも、人人は逃れ出て、喜びいさんでおまえの腕のなかへ身を投ずるだろう。詩人たちはおまえをうたい、その歌のなかでおまえの藝術の魅力をまねび得ようと努めるだろう。罪のない少女らさえおまえを願い、そして、おまえは甘い幸福を惠む神となつて、かの女らのまのあたりにかかつて離れ得ぬものとなろう。」――

眠りの悲歎は變じて、勝ち誇る感謝の念となつた、そしてかれには、グラツィエたちのうちで最も美しいパジ

テアが妻わされたのである。

*

死　神

レッシングの墓所における対話

「天國の童よ、なぜ此處に立つているのか。消えゆく炬火を
　地に垂れて。けれど他の炬火がほのおだち
おまえの香わしい肩の邊に光り輝く。
　これより美しい深紅の光輝をわたしの眼はみたことがない。
おまえはアモルなのか。」——

「仰せの通り。わたしはアモルだけれど、
　この面帕をきて人間に死を命ずる。
神さまがたの見られたには、守護神も數あるなかに
　わたしほど穏かに人の心を解き放すものはない。
そして、哀れな人人を救うわたしの鋭い箭を
　神神はみずから歡樂の盃のなかへ浸したのだ。

ヘルダーの「パラミュティエン」

それからわたしは、離れ去る魂に愛の口づけをして、
　けがれなき喜びを眞に享受させるために天上へ導く。」——

「けれどおまえの弓矢はどこにあるのか。」
——「この勇氣ある賢者は、
　みずからはやくも精神を肉體から分離していたから、
箭はもちいないのだ。かれの輝く炬火を
　わたしは穏かに消す。するとたちまち深紅の光から
このも一つの炬火が輝きだす。眠りの兄弟たるわたしは、かれの靜かな眼のあたりに、
　まどろみをふり注ぐ、かれが天上で目ざめるまで。」——

「そしてこの賢者はだれだ、おまえが地上の炬火を
　ここに消し、いま、はるかに美しさ優れた炬火の燃え出る人は。」——
「それこそ、アテネみずからが、かしこで勇者ディデス[1]に
したように、

神神を見うるほど眼光を鋭くしてやつた人だ。[2]
わたしが地上にたらしていた炬火で、レッシングはわたしを認めた、
そしてわたしは、直ちにかれの第二の炬火を輝かしくともしてやつた。」

(1) ホメーロスの「イリアス」第五卷、八三五行以下で、智慧と藝術の女神アテネは、姿をかくす兜をかぶり、戰車にのつたテュデウスの息子ディオメデスのところに來り、かれをアレスとの鬪爭に驅りたてる。——(2)引喩。一七八一年に死んだレッシングは、一七六九年發表した「古代人は如何に死神を形づくつたか」というかれの論文で、二守護神についての數種の古代的描寫があるなかで、倒れた炬火をもつたほうを死神だと主張した。ヘルダーはかれの輓歌の結句で、同時に、同じ題名をもつたかれの補足的な論文を暗示している、その論文の第九の書翰のなかで、かれはアモルとプシュヘのグループを「天使あるいはアモルあるいは眠り」と解釋しているが、それはこの世を去つたもの（魂）を穏かに「極樂の」喜びへと導き上げるものである。

＊

フロラの選擇

ユピターが、創造しようと思う萬有を、理想的な姿形で目前によびだしていたとき、かれが合圖をすると、ほかのものに交つて花のフロラが出現した。かの女の魅力と美しさは筆舌を絶し、かつて大地がその清淨無垢な胎内から生んだものは、かの女の容姿、その體軀、色艶、衣服のうちに集められていた。すべての神神はかの女をうち眺め、すべての女神たちはその美を妬んだ。

ユピターは言つた、「この數多い神神や守護神たちの群から、ひとりの愛人を選ぶがよい。だが虚榮の子よ、じぶんの選擇にあざむかれぬよう氣をつけるのだぞ。」

浮薄な身ぶりでフロラは周圍をみまわした。おお、かの女が、あの美男の、かの女に愛のほのおを燃している（日の神）フェブスを選んだらよかつたのに。けれどもこの神の美は少女フロラには氣高すぎた、かの女へのかれの愛は、あまりにも言葉少いものであつた。

あちこちとかの女のまなざしは移つてゆき、ついにかの女は——だれがそれを考えたものがあつたろう——數ある神のなかの最下位のひとり、浮氣な（西風の神）ツェフィルを選んだ。

「心なき女よ、」と父は言つた、「おまえの性が、その靈界の原型においてもすでに、高貴な、穏かな愛よりも、多情な、たやすく眼を惹く魅惑のほうを好むとは。おま

えがこの神を選んだとしたら（かれはフェブスを指ざした）、おまえとおまえの全同性者は、かれと不死を分ちあつたろうに。だがいまは、おまえの良人を娛しむがよい。」

ツェフィルがかの女を抱擁した、するとかの女の姿は消え失せてしまつた。花粉となつて大氣の神の領域へ飛び散つたのだ。

ユピターが、かれの世界の理想的な姿形を現實に實現せしめたとき、大地の胎が飛散した花の萠芽をうみ生かそうと待ちかまえたところで、かれは愛人の遺灰の上で眠り込んでいたツェフィルに向つて叫んだ、「さあ、若者よ、さあ、おまえの愛人を連れてきなさい、そしてかの女の地上への出現を見なさい。」ツェフィルは花粉と共に來た。花粉は大地の廣大な地域に飛んで行つた。フェブスは、昔ながらの愛情から、花粉に生氣を與えた。泉と流れの女神たちは、姉妹の好意から、花粉のなかへ滲み入つた。ツェフィルがこれを抱き、かくしてフロラは數かぎりなく多樣に芽ぐむ花となつて出現した。

花のおのおのは、天國の情人をふたたび發見して、どんなに喜んだろう。かの女らはすべて、かれの戯れのキスと、ものしずかに搖れるかれの兩腕に身をまかせた。はかない喜びだ。この美女が胸をひらき、芳香と色彩とのあらゆる魅力をこめて、婚禮のベッドを用意すると、たちまちのうちに、飽滿したツェフィルはかの女の許を去つていつた。そしてフェブスは、あまりにも純情なかの女の、欺かれた戀に心から同情して、衰滅に導く日光を送り、かの女の悲愁を短時日に終熄せしめたのだ。

おまえたち少女らよ、春毎に、新しく、この同じ物語は始まる。おまえがたは、フロラのように花と咲いている、どうぞツェフィルとは別の愛人を選んでください。

＊

やまばとの創造

二人の愛人同志が共に座つて、願いや望みの初初しいうつつの夢にひたつていた。だが悲しいかな、かれらの願いは永久に夢として止ることになつた。假借なき（運命の三女神のひとり）パルツェが、嫉妬の鋏をふるうと、かれらの魂は、一つの口づけをし、一つのためいきをつく間に、互いに離れ難いままに、この世を去つてしまつた。

二つの魂が、肉體から離れて、最初に見たものは、かれらの廻りに浮びただよつている愛の女神であつた。悲

しみ歎きながら、かれらは女神の胸のうちに逃れ入つた。――「親切な女神さま、あなたは、わたしたちに加護を與えて下さいませんでしたね。あなたは、わたしたちの願いをお知りになりながら、それを人の世で樂しむことをお許しになりませんでした。けれど、わたしたちは、影の姿となつてからも、別れずに愛しあおうと思います。」

「影の愛は、」と感動した女神は言つた、「悲しい愛です。おまえたちにふたたび人間の生をあたえることは、わたしの力に及ばないのですが、わたしの國に住むものの形におまえたちを變えることは、運命がわたしに許してくれています。おまえたちは鳩になろうとは思いませんか。勝誇つてわたしの車をひき、いちゃつきや冗談の仲間となつて、神の食物をたべて暮すのです。おまえたちの貞實さや愛には、この報いをあげるだけの値うちがあります。」

「親切なお母さま、おゆるし下さい、」と愛する二人は口を揃えていつた、「危險の多い、あまりにも輝かしい報いを下さることはおゆるし願います。冗談やいちゃつきの仲間となつて、あなたの勝利に輝く宮廷の喧騒と華美のうちに暮したら、わたしたちの貞實と愛情とをたれが保證してくれるでしょうか。わたしたちを鳩にして下さるなら、どうぞ淋しい場所に行かせて下さい、わたしたちの貧しい巣のなかで、わたしたちがお互いの一切のものとなり、永久にそのままであることができますように。」

女神は變化の言葉をいつた。見よ、そこにくくと鳴くやまばとの最初の一對が飛び立つたのである。かれらはくくと鳴いて、女神に感謝を述べ、かれらの墓場に飛んでいつた。かれらはそこで、貞實と憐れな歎きの聲とをもつて、老いたパルツェの心を動かし、娯しむことのできなかつた人間の生をふたたび與えたまえと訴えるつもりなのだ。しかし、ふたりの共通の歎きもまた、かれらにとつては慰めである。荒凉たる場所で享けあうかれらのやさしい忠實な愛情は、かれらにとつて（愛の女神）ヴェヌスの玉座の下のあらゆる諧謔や歡喜にたちまさつているのだ。

パルツェはいまもなお、かれらに鳩の姿をあたえたままであり、移ろい易い人の心の、あやうい運命からかれらを守つているが、それは果して、嫉妬なのだろうか、親切なのだろうか。

＊

ゆりとばら

粗い、黒い大地の生んだ、やさしい娘たち、たれがおまえらに美しい姿を與えたのだろうか、言つてごらん。ほんとうに、清楚な指でおまえらは造られたのだから。おまえらの蔓からは、どんな小さい精靈どもがよじ登つたか。そして、女神たちがおまえらの葉の上で身を搖りうごかしたとき、どんな快よさをおまえらは感じたか。安らかな花たち、言つてごらん。女神たちは喜ばしい仕事をどんなふうに分擔したか、かの女らの優美な織物を、かくもさまざまに紡ぎ、かくも多様に飾り刺繡したときに、女神たちはどのように目くばせをしあつたか。——

だが、やさしい子供たち、おまえらは默つているね、そしておまえらの生存を樂んでいるのだね。よろしい。おまえらの口が默して語らぬことを、教えに富む寓話に語つてもらおう。

かつて、全裸の巖の姿で地球が立つていたとき、見よ、（半神半人の少女）ニュンフェたちの親しげな一と群れが、處女の大地を擔つて來た。そして、かいがいしい守護神らは、全裸の巖に花を咲かせる準備をしていた。かれらは仕事の分擔を幾つにも分けた。雪の下、冷い小さな草のなかでは、控目な謙讓がもう仕事をはじめていた、そして、身を隱すすみれを造り出したのである。希望はその背後から歩みより、爽快なひやしんすの小さな蔓の高杯を、清涼な香氣で滿した。いまやほかのものたちもひとしく成功したので、色さまざまに美しい花の、誇らかな綺羅を飾つた群れがあらわれた。ちゅうりっぷが頭をもたげ、水仙は思い焦れる目であたりを見廻していた。

このほかにも、あまたの女神やニュンフェらが、さまざまの仕方で働き、美しい形像に欣喜しながら、大地を飾りたてていた。

そして見よ、かれらの作品の大部分が、その榮譽や榮譽への歡喜ともどもに、凋落していつたとき、ヴェヌスはしもべのグラツッエらに次のように言つた、「優美の妹たち、なぜ躊躇しているのです。お立ちなさい、そしておまえらの美の力を別つて、ひとしく凋落の運命をもつ花、人間の目に見える花をつくつてみなさい。」かの女らは地に降り立つた。そして、純潔のグラツィエ・アグラヤは、ゆりを造つた。タリアとオイフロジネ[1]とは、姉妹の手で喜びと愛の花、清淨なばらを織り出した。

（ルダーの「パラミュティエン」）

（1）アグラヤ（祝祭の光輝）、タリア（花咲く幸福）およびオイフロジネ（祝祭の喜び）という名は、ヘシオドスの名の下に行われている「神統記」のなかの、優美の三女神の名である。

野と庭の花の多くは、互いに妬みあつた。ゆりとばらとは、他を妬むことなく、皆から妬まれた。かの女らは、姉妹のように仲むつまじく、共にひとしく（四季の女神）ホラの廣野に咲いて、互いの飾りとなつているが、姉妹のグラッィェたちが力を合せて造りだしたからにほかならない。

少女らよ、あなたたちの頰の上にも、ゆりとばらは花咲いている。その三女神、純潔と喜びと愛情とが、和合して離れずに、ひとしくあなたたちの頰の上にも宿りますように。

＊

アウロラ

（曙の女神）アウロラが、神神の間で歎き訴えるには、人間たちにあれほど賞讃されるじぶんなのに、かれらに愛されて訪れをうけることがきわめて少い、殊に、かの女をいちばん謳歌し稱揚する人人が、いちばん愛しもせず訪れもしないというのだつた。「おまえの運命を悲しむことはありませんよ、」と智慧の女神が言つた、「わたしとても異つた狀態にあるでしようか。

「それに」とかの女は續けた、「おまえをゆるがせにする人人を見てごらん、そして、かれらがおまえをどんな戀敵ととり換えているかをごらん。通り過ぎるときに、あの人たちが嗜眠の腕にだかれて、心身を腐らせているありさまを眺めなさい。

「ねえ、おまえは友達がないだろうか、おまえには餘るほどの崇拜者がないだろうか。すべての被造物はおまえを讃美している。花という花は、目を覺して、おまえの深紅の光輝で新鮮な美しさを身にまとう。鳥の群はおまえを歡び迎える。どの群も、おまえの束の間のあらわれを樂しむ新しい仕方を工夫する。勤勉な農夫、孜孜としてはげむ賢者は、まだおまえをゆるがせにしたことはない。かれらはおまえのさし出す高杯から、健康と強壯と、安靜と生命とを飲み、あの寢ぼうな愚かものの饒舌な群れにさまたげられることもなく、平穩におまえをたのしむことに、二重の滿足を見出している。冒瀆なしに樂しまれ愛されること、これをおまえは幸福とは思わな

いの。神と人間とにあつて、これは愛の最高の幸福なのです。」

アウロラは、かの女の輕率な訴えを恥じて頰をあからめた。そして、かの女とひとしく純潔で無邪氣な美女たちは、アウロラの幸福をこそ願うがよい。

＊

夜と晝

夜と晝とが互いに優越を爭つた。火のような、光り輝く少年、晝が、爭いを開始した。

「かわいそうな黑いお母さん、」とかれは言つた、「あなたは、わたしの太陽に比すべきもの、わたしの天、わたしの草原、わたしの活動的で倦みのない生活に比すべきものの、何をもつていますか。あなたの殺したものをわたしは新しい生存を感じうるように蘇生させる。あなたが萎え衰えさせたものをわたしは興起させる。」

「けれども、おまえが興起させることにたいして、ひとはいつでも感謝するでしようか、」と控目な、面紗をかけた夜が言つた、「おまえが疲らせるものを、わたしが元氣づける必要がないとでもいうの。それに、多くのばあい、おまえを忘れさせなければ、元氣づけようもないというしまつではありませんか。——それにひきかえ、神神と人間との母たるわたしのばあいには、わたしの生み出したものすべては、滿足してわたしの懷にいだかれるのです。それらがわたしの衣の裾にふれると、たちまちみんなおまえの眩惑を忘れ、靜かにその頭をたれるのです。そこでわたしは、平靜になつた魂を引きたて、天國の甘露で養つてやるのです。おまえの日光の下で天の方を見る勇氣のなかつた目には、夜の扉を開いて、無數の太陽や無數の形象の群、新しい希望、新しい星辰などを見せてやります。」

饒舌の晝はいま、夜の衣の裾に觸れた。すると、沈默し疲れて、かれ自身夜の懷に陷入つて、抱かれてしまつた。しかし夜は、星をちりばめた外套につつまれ、星辰の冠をかぶつて、永遠に靜かな面もちのままに座つていた。

＊

ばら

「わたしは、周圍の花という花が、すべて凋んで死ん

ヘルダーの「パラミュティエン」

で行くのを知つています。それなのに、ひとはいつもわたしだけを萎れやすい無常なばらとよぶのです。恩を知らぬ人間たち、わたしの短い生涯が、あなたがたをたつぷり愉快にしているではありませんか。そうです、わたしは死んだ後にさえ、あなたがたのために、甘美な名聲を謳う墓表や、薬料や、清涼と強壯に富んだ香油などを差出します。それなのに、いつもあなたがたが『ああ、凋れやすく脆いばら』と歌つたり言つたりするのを聞くのです。」

花の女王は、玉座の上で、このように歎いた、おそらくかの女もすでに、わが身の美の衰微を感じていたのだ。かの女の前に立つていた少女がこの言葉を聞いて言つた、「美しく可愛いい花、わたしたちのことを怒つてはいけません。高貴な愛、やさしい好意からの願いを、忘恩などとよばないでおくれ。わたしたちの廻りのすべての花が死んでゆくことは、わたしたちも知つているし、それが花の運命だと考えています。けれども、花の女王であるおまえ、おまえだけは不死不朽にふさわしいものであつてほしいし、またふさわしいと考えているのです。それだから、わたしたちが、この願いがかなえられないのを見るたびに、歎くのを許しておくれ、わたしたちは、おまえの身の成行を歎きながら、わが身のはかなさを思い悲しんでいるのです。人生の美しさ、若さ、喜び、すべてこれらをおまえにくらべて、それがおまえと同じように衰え滅びてゆくものだから、わたしたちはいつも歌つたり言つたりするのです、『ああ、凋れやすく脆いばらよ』と。

*

エ　ヒ　ヨ

善良な子供たち、信じてはいけませんよ、ひかえめなエヒョ（こだま）が、かつて浮薄なナルツィスの愛嬌のある情女だつたとか、仕える女神(1)をおしやべりで裏切つたとかいう詩人の寓話を。なぜなら、かの女が死すべき人間に姿を見せたことは一度もなかつたし、一つの聲がまず最初にかの女の口から出たということもなかつたのですから。ところで、わたしがきみがたにエヒョについてほんとうの話をしますから、聞きたまえ。

（1）女神とはユピターの妻のユノのこと。オヴィドのナルツィスとエヒョについての物語によると、ユノは、ユピタ

ーがニュンフェと交際する現場を押えようとするのに、エヒョのおしゃべりによってしばしば妨げられた。そこで女神は、罰として、エヒョに他人の話の最後の文句をまねて言う能力だけを與えた。

愛の娘ハルモニア（諧調）は、ユピターが創造の業を行う際の活動的な共力者だつた。かの女は、母らしく心をこめて、生成するものすべてに、一つの音、一つの響を與えたが、それは被造物の内部に滲透し、その全存在を統合し、こうして、それを同胞である一切のものと合一せしめた。ついに、この善良な母は、精根が盡きてしまつた。そして、かの女は生れつき半ばしか不死でなかつたから、いまはその子供たちから離れて、この世を去らなければならなくなつた。この別離がどれほどかの女の心をうごかしたろう。かの女は、ユピターの玉座の下にひれ伏し、懇願して言つた、「力づよい神よ、わたしの姿は神神の間から消えてもかまいません、けれども、わたしの心、わたしの感情は絶やさずに、心をこめて現身をあたえてやつたものたちから、別れさせないでください。姿はあらわさずとも、せめてあれたちの邊りにいて、わたしが與えて幸せにもし、不幸にもした苦痛と喜びの響一つ一つを、あれたちと共に感じ、別ちあいたいのです。」

神は言つた、「おまえが、目に見えぬところで、かれらと共にその不幸を感じたとして、かれらに加護をあたえることもできず、どのようにしても姿をあらわし得ないのだつたら、おまえの願いは何の役に立つだろうか。このことは、取消しがたい運命の宣告なのだから。」

「ですから、わたしがあれたちに答えをすることだけをかなえてください、隱れたままで、ただあれたちの心の聲をくりかえすことのできるようにして下さい。そうすれば、わたしの親心は慰められるのです。」

ユピターの手が穏かにかの女に觸れると、その姿は消えた。かの女は、形のない、弘く至るところにいるエヒョとなつた。その子供の聲の響くところ、母の心はこれに應じて響く。かの女は、すべての被造物の内部から、あらゆる同胞たるものの内部から、弦が調和した韻律を響かせるように、苦痛と喜びとの聲を語り出る。冷嚴な岩さえかの女に滲透せられている。淋しい森も、かの女によつて生氣を與えられている。そして、おお、やさしい母、孤獨と聲なき森の内に恥じかくれて住むもの、あなたは、響を失つた人間の心や魂の、荒寞たる仲間となつているときよりも、孤獨やもの言わぬ森のなかにいると

ヘルダーの「パラミュティエン」

き、しばしば一層の慰めをわたしに與えてくれたのだつた、あなたは、わたしのためいきを、穏やかな同情とともに返してくれた。どれほど世に見捨てられ理解されない狀態にあつても、わたしは、あなたのにぶい反響の一つ一つから、萬物に滲透し、萬物を結合する母がわたしを認め、わたしの聲を聞いてくれるのを感ずるのだ。

＊

瀕死の白鳥

「いつたいわたしだけが、啞のように、歌もうたわずにいなければならないのか、」と、ためいきをつきながら、沈默の白鳥はひとりごち、いと美しい夕燒の光輝をあびて游泳していた、「羽のある仲間の全社会で、ほとんどわたしだけが。なるほどガァガァいう鶯鳥やコッコッというめんどり、また、孔雀などのしわがれた聲をうらやむのではない。だが、おまえ、おお、やさしいうぐいすよ、おまえの聲がうらやましいのだ、この聲に呪縛されたように、波を引くわたしの歩みがにぶり、空の光の反照をあびながら醉つたように低徊するときなど。わたしはどんなにかおまえをうたいたいだろう、金色の夕陽よ、おまえのうつくしい光とわたしの歡喜とをうたい、おまえのばらの顏ばせをうつした水の面に身をくぐらせ、そして、死にたいのだ。」

聲もなく恍惚として、白鳥は水に沈んだ。そして、かれが波の下からふたたび浮びあがつたとき、忽然として、光りかがやく人の姿が岸べに立ち、かれを側近く誘うのであつた。それは、夕陽と朝日の神、美しいフェブスであつた。「優しく愛らしい奴、」とかれは言つた、「おまえが默默と心に懷き、今日まで許されなかつたその願い、ききとどけてやるぞ。」神はこう言い放つやいなや、その手にした七絃の琴を白鳥に觸れ、そして、不死の調べをその琴の上に彈奏した。調べは恍惚としてこのアポロの鳥に滲み入つた。肉が溶け心が氾れる思いで、かれは美の神の絃に合せてうたつた。かれは、感謝し歡喜しながら、うつくしい太陽やかがやく湖を、また、わが身の純潔で幸福な生涯を詠じた。かれの姿のように、その調和したうたはやさしかつた。甘美な、まどろむような調べのうちに、かれは長い波を跡にひいてすすみ、ふたたびわれに返つたときは、ついに――極樂に達して、眞實な天國の美にかがやくアポロの足もとにいた。生あるうちに與えられなかつた歌は、かれの「白鳥のうた」[1]と

なつた。かれは不死なるものの調べを聞き、神の顔ばせをみたのだから、このうたが穏かにかれの四肢を解いて死を與えたのにちがいなかつた。感謝しつつ、かれはアポロの足もとに身をすりよせ、神の調べに耳をかたむけていた。ちようどそのとき、かれの貞淑な妻も天國についた。妻は甘美な歌をうたいつつかれを慕い、愁歎のために死んだのであつた。純潔の女神はふたりをその寵兒に加えた——女神が青春の湖に浴びるとき、その貝殻の車を曳く美しい一對となつたのである。

（1）「白鳥の歌」とは傳説の「死に瀕した白鳥のうた」を意味し、一般に「辭世」の意に用いられている。

もの言わぬ、希望に滿ちた心よ、忍びたまえ。きみに耐え得ないだろう故に、きみの生あるうちには許されないことも、きみの死の瞬間が與えてくれる。

ヘルダーの「パラミュティエン」

*

スフィンクス

地球と人間とのものがたり

1

「おまえたちは、あの黑い雲が見えるか」と、神神が喜びのうちに暮していたある一日のこと、ユピターが言つた、「あの雲は、われわれの足の下深く大氣のうちに、薄明く混沌としてただよつている——どうだろうか、われわれがこれを生あるものの住居となし、われわれの喜びの新しい遊びの手だてとしたら。」かれがこう語ると、すべての神神は賛意を表した。神神の母レアは、直ちに巧みな（火および鍛冶の神）ヴルカンを下界におくり、かの女の永遠に燃える祭壇から天國の火をかれの手に託した。かれは、猛然として下界に降り、雲の核の巖で足をくじき、そのためかれはいまなお跛をひいている。かれは、その炎をもつて巖の裂口にはいつてゆき、そこをととのえて、（かまどの女神）ヴェスタの靈場とし、またそのなかに坑道をつくつて、ここでいまなおかれの金屬を鍛えている。

かれの不滅の母、ユノは、かれを見送つた、そして、かの女のまなざしのほほえみで、最上部の濁つた空氣を霽らした。（海神）ネプトゥンは、その水を地上にそそいだ。そこで海と河とができた。（智慧の女神）パラスは、かの女の面紗を投げ降した。そこで大氣の美しい碧色が生じ、金色の星辰に飾られた。アポロは、地の周圍をめぐり、その光を降りそそいだ。その貞潔な妹は、緩かに

かれの後を追い、地の大氣のうえにかの女の頭の飾り、月を殘した。（農の女神）ツェレスは、種子と草木の滿ちたみのりの角を空けた。そして、崇高なヴェヌスは、天降つて、萬物を生命と愛とで滿した。新しい舞臺は綠なし花咲いた。そこですべての神神は集つて、この新しく愛すべき地の谷を享樂し感受する被造物を創ろうとした。

（1）月の女神アルテミス（ディアナ）のこと。

そのとき、神神の父が合圖をすると、生命が湧いて砂塵に入り、神の姿をもつた形像が生じた。そして女神たちはいそぎ近づいて、それを地上からだき起した。パラスがその額に手を觸れると、頭のうちに智慧の火花が發した。ユノがその目にふれると、兩眼は莊重にあたりを見廻した。ヴェヌスがその唇にふれると、女神の功德の最も美しい賜もの、愛の說得がその唇へそそぎ入つた。こうして、神神はひとりの男をつくり、こうしてひとりの女をつくつた。女神たち、神たちは、かれらの被造物をみて喜んでいた——

突如としてそのとき、運命の宣告を聞くために送られていた神神の使が歸着し、恐怖しながら報告をして、冥府の巨大な神神は、この新しい被造物を怒つていると傳えた。「地下の神神に相談もなしに、」と使者は語つた、「あなたがたはかれらの暗黑の支配から廣大な分野を奪つたのです。それ故、（冥界の王）プルトは憤激し、老いた（運命の女神）パルツェたち、荒狂う（復讐の女神）エリニェたちは激怒しています。（懲罰の女神）ネヌジズは、運命のもとにあなたがたを告發しました。そして峻烈な母(1)は、その訴えを聽きとどけたのです。かの女の斷乎とした判決をおききなさい、

「短命が、新しい地上におけるこの生あるものどもの定めとなれ。そして、地球は巖から生ぜしめられたのだから、この死すべきものの生涯は難い一生であれ。巖の內部にある金屬は、かれらの永遠の困苦、益々增大する爭鬪となり、多くのものにたいしては、腐敗しゆく死となれ。同胞は同胞を殺害し、人間の支配者はその人民を屠るであろう。友は友の生命と安靜とを窺い、天の神神の甘美な賜もの、悟性と說得と愛さえ、かれらにとつては、過誤と虛僞と苦惱との、不斷に流れ出る源泉となる。このように運命は欲する。」

（1）秩序と正義の女神テミスのこと。ギリシャ人にとつて

は、運命の女神モイラたちの母であり、ネメジスはモイラと同屬關係にある。

（神神の使）メルクルが語つたとき、すべての神神は色蒼ざめてたたずんでいた。というのは、あたかもかれがまだ言葉をつずけていたときに、運命の待女、犯し難いネメジスが、すでに近づいてきていたからである、あの、つねに地上をめぐり歩き、善に報い惡を罰する女神が。姿をあらわすことなくかの女は歩きまわり、行動を記す、そして、かの女がその帳簿を假借なき女神に呈すると、それに應じて運命は量るのである。

2

神神は呆然としていた。しかし方策と救濟の道がなくはなかつた。運命は峻嚴ではあるが、また正義であることをかれらは知つていた。その宣告はひるがえされぬが、鋭鋒を轉じ和らげることはできる。メルクルのもたらした判決には、新生の人人は冥府の神神の所有たるべしとは規定されていなかつた。同樣に、運命の人間に課した苦惱を柔らげることが、憐みぶかいものに許されぬというわけでもなかつた。そこで、あらためてメルクルを送つて、高貴な運命のもとにのぼりゆかせ、運命の宣告を二重の觀念で緩和させようとした。

「正義の女神よ、」とメルクルは言つた、そして永遠の攝理の表の前へ歩んで行つた、「人間はその存在にたいしては罪がありません。自己をみずから創つたのではないからです。それ故、人間を生へよび出したものが、人間の短くて危險な生涯をやわらげ甘美にすることを許してください。」

久遠なる必然の娘は、肯んじてうなずいた。そこで、メルクルは言葉をつずけた。

「正義の女神よ、地球の大地は冥府の神神から奪つたのですから、これは永久にかれらの支配する分野としましょう。かれらはそこから死すべきものに害惡と苦痛とを送るがよいのです。しかし、地球の表面と上空にある一切の生物は天の神神の作品です。それがいつまでも神神の支配下にあることをお許し下さい。パルツェが運命の糸を切れば、人間の肉體は塵埃となるも宜しい。しかし、天から授つた氣息は、それの發生したところ、天の領土に、わたしが導いてゆきますからおゆるし下さい。」

「おまえの願いは度が過ぎます、」と運命がいつた、「ネメジスお話しなさい。」

ネメジスは近づいてきて言つた、「永遠の法則は報復

をもとめます。地上で悪を犯し、しかもこれを贖わぬものは、その魂の清浮になる日まで、冥府において贖罪するがよい。その後におまえはこの魂を好きなところへつれて行ってよろしい。純潔で善良なものは、地獄の眞只中を通ってでも、つれて行くことができる。わたしはおまえを妨げはしない。」

運命は肯定してうなずいた。そしてメルクルは、最も正義なる玉座のもとを去った。

3

さて地上では、何という異った場面が展開されていたことだろう。天上と地下との神神は、互いに、幸福にして不幸な人の群をめぐって、武器なき闘いを行っていた。というのは、かれらの支配の境界は、運命によって區隔せられ、公正なネメジスがこの境界の守護者であったからである。冥府の口は災禍をもたらした。病氣や悪疫、地震や噴火が上ってきた。また、墮落をさそう金や、人を腐敗させる鐵など。パルツェたちは運命の絲を織っては切った。エリニェたちは、瞋恚の把火を、人の心めがけて揮った——しかし、行爲を記錄するネメジス。が、かれらに許してうなずくことのほかはできなかった。

これに反して神神は、人間への同情から、かれらを援助するために、單なるひまつぶし以上のことを行った。この困苦する人人は、神の作品だったからである。メルクルは降下して、かれらに言葉を贈った。アポロは降下して、青年の牧人となり、人間を誘って平和な谷間にゆき、唄と愛とで青年の心情を和らげた。(酒神)バホスは降下して、人間に回春のぶどうを教示した。かれは客を迎える祝杯にそれを搾り、友情のばらと、おだやかな忘却の蓮との花環で、杯を飾った。こうして、神神は、人知れずあまたの姿となり、數かぎりなく人間にたち交った。かれらは貧者の小屋を訪れ、殊に罪のない青少年の遊戯に加わった。ヴェヌスの從者のなかで、優美と德の女神たちは、人間が愛の魅力にあふれ、易易としてあらゆるやさしい印象をうけていれるとき——その最も美しい時代にはたらきかけた。ついにはそれのみならず、人間各自は、なお一そう大きな保護をうけるために、生誕の日に、おのおの有力な守護神をうることになった。これは、姿なく人間に伴わしめるが、人間の理性を獨自の活動に慣らすために、教えるよりはむしろ警め、導くよりはむしろ救うことに力を致さしめる神の意圖であっ

た。

4

神神が行つたこと以上に、かれらの爲すべき何があつたろうか。しかも神神は、その手でつくつた作品について、多くのむだぼねおりをみることになつた。神神の、いとも見事な發明の贈物が、この子供らしい種族に利益をもたらしさえしたら、神神は喜んで、元來は守護神と姿を變えた神神とが人間のために發明したものを、じぶんらがみんな發明したのだと考える人間たちの小さな誇を許容してやつたろう。しかし運命の宣告に從つて、神神にとつては最善が最惡となつたのである。バホスはその搾つたぶどうについて、アポロはその唄と踊りについて、メルクルはその琴と說得の言葉とについて、最後に最もひどいことに、ヴェヌスはその喜びと愛の魔杯について、かれらが考えもおよばず、また、それにたいしてもはや何のてだても知らないような結果をみた。愚かにも理に背いた人間たち――かれらは、神の最も隱れた變裝をも認め、これを避けるに至つたのである。德と優美とはあらゆる遊戲から追放せられた。愛の魅力とあからむ羞恥とは青年の頰から遠ざかつた。そして、守護神の聲にたいしては、どの耳も聞えず、どの心も刻薄であつた。「われわれは神ではない、」とかれらは言つた、「だから、われわれだけで暮したい。理性が與えられているのだから、われわれはめんどうな教師のふき込む聲など必要ではない。」

パルツェたちは鋏をふるい、エリニェたちは炎を撒きちらした。ネメジスの記錄には、地上は不幸な人間に滿ち、地下は懺悔する人間に充つ、とあつた。人間たちの忘恩にたいする悲しみと怒りにあふれ、神神はオリュンプ山にひきこもつてしまい、人間を野卑な地上の住いで爲すがままにしておいた――

5

が、ついに、パラスがあるときユピターの前にあらわれ、あえてかれに墮落した人類を想い起させた。「父よ、あなたは落ちついていらつしやるのですか。」とかの女は言つた。「あなたは落ちついて、あなたが不幸な人人をつくつたことを、みずからお赦しになることができるのですか。」

「わたしは、かれらを不幸につくろうとは思わなかつた、」とかれは言つて、口をつぐんだ。

「あなたはそういつて心を鎮めておられます、」と女神は辯護の言葉をつぎけた、「けれども、あなたのお心は、それでまつたく鎮められたのではありません。なおさら、あの不幸な人間たち自身の心が安らかになることもなく、また、人間たちの狀態を和らげ改善する一切の手だてをあなたの御手にゆだねた、あの高貴な運命の心こそ一ばん安らかではないのです。」

「そして、どんな手だてが殘つているというのだね、」とかれは不快なおもちで答えた。「手だてはすべて試みられ、そして、恩を知らぬものどもを束縛し、不幸な人人の不幸をかれら自身の罪によつて增加する結果となつたのではなかつたか。娘よ、わたしをほつておいてくれ。」

「父よ、お怒りになつてはいけません。ただ、いままでのように、お心寬くわたしの話をおききください。わたしたちが、これまで死すべきものたちにたいして試みた手だては、外からの、よそよそしい手だてだつたのです。ひとりの神がかれらを加護し、ひとりの守護神がかれらに戒告し、ひとりの聖靈がかれらに代つて發明することになつていました——かれらが、外からのこの慈善を、わがものがおに占領し濫用したとて、何のおどろくことがありましよう。ついには、かれらが、この煩わしい神神との交りの一切に倦んでしまつたとて、何の不思議がありましよう。善は、かれらの心から湧きでたのではありません。それは、かれら自身の魂のうちに生れたのではなかつたのです。」

「娘よ、そこでどういう結果が生れたというのかね。」

「それは、かれらに不朽な生みの喜びの基い、みずからみごもる喜びを與えなかつたことになるのです。おお、父よ、明らかにわたしたちは、人間をつくるときにしくじりをしたのです。わたしたちは、調子を弱くかぼそくとりすぎましたので、わたしたちの口からでる氣息が、神の心情をつたえることがあまりにも少くて、運命の課した危險に耐え得なかつたのです。ですからわたしたちは、かれらに、もう一そう緊密に結びつき、かれらの內部の力をつよめ、人類を通じて人類を向上させるように努めねばならないのです。」

この奧深い女哲学者は、おそらくもつと長く語りつずけたかもしれなかつた。だが、狡猾なヴェヌスが、かの女の話をさえぎり、ユピターに向つて——愛の林檎を投げたのである。

パラスは口をつぐみ、面紗をおろした。というのは、

ヴェヌスの解釋は、かの女の奥深い忠告の意味するところと異つていたからだ。しかし、ヴェヌスの解釋は氣に入られ、ユピターは神神に率先して實例を示した。かれは、こつそり忍んで下界へ降つた。あるいは黄金の雨となり、あるいは白鳥となり、あるいは、また、いやしくもかれが神の精神の閃光が成育しうる何らかの美を見出したところでは、他の姿形となつて。二三の神神、また女神たちさえ、まんざらでもなくかれに從つた。林檎をもつて忠言をあたえた、情愛のふかい人類の母は、この忠言の成就にも殊さら興味をもつた。そこで、しまいには、恍惚とした愛人はたれでも、その戀人を抱くとき、ヴェヌスかグラツィエをいだく思いをしたのである。純潔なディアナすら、人間を高貴ならしめようとする心ひろい欲求にとらえられた、そして、かの女のエンデュミオン(1)にあえて身をもつて近づく勇氣がなかつたので、かれのまどろむ目のうえに、愛に熱したまなざしを凝らしたのである。だが、二人の女神たち、ユノとパラスだけは、つねに純潔であつた。前者は自尊と嫉妬から、後者は、その忠言は完全に失敗してしまつたのだが、貞淑な智慧から。

(1) ギリシャ傳說で女神ゼレネの愛人。獵人あるいは牧人として敍述されている。ゼレネは、無事にかれを接吻できるように、眠りにおとし入れた。ゼレネは月の女神と考えられていたので、ここでは同じく月の女神ディアナ(アルテミス)にこの物語を適用した。

ヘルダーの「パラミュティエン」

6

さて、人類の舞臺は、その内面において變化せしめられた。外部の力によらず、自己の力によつて、半神や英雄たちがあらわれ出た。神性の種子は死すべき肉體に植えつけられたのである。いまや、何という偉大な行爲が行われたことか。狹い人間の胸は、何と廣大な渴望を容れるようになつたことか。ユピターの息子(醫神)エスクラピウスは、死者を蘇生せしめ黄泉の主權を縮少した。ヘルクレスそのほか同種屬の多數のものは、地上を怪物から解放し、勝利者となつて地下の住居(1)へまでも突進していつた。もつと穩やかな神の息子たちは、もつと穩やかなやりかたで、抑壓された人人を援助した。シモニデス(2)に先だつ多くの人人を、カストルとポルクスは救濟したのだが、歷史はかれらの傳說を保存していない。かれらは、救濟の炎となつて船の檣(3)の上をただよい、輝く星となつて戰場の上にただよつて、闘う人人を援助した。アポロと(美の女神)ムーゼとの息子(4)は、動物的な人

間に、さらにかれの絃樂を仕込み、その愛するオイリディケを追つては、冥界にまでも下つた。さてまた神神の息子たちは、友情と誠實の盟約をむすんで、死の際にまでも及んだ。それは、諸王國を建設し、法律を與え、諸邦を設立し、こうしていまなお永遠の餘榮に生きる英雄たちであつた。かれらは、下界の谷谷を通つて導いてゆくメルクルの命を待たなかつた。炎に淨められて、かれらはみずから天國へ昇つていつた。そして神神は、その息子や兄弟としてかれらを歡び迎えたのである。天に、また地に、神の息子たちは勝利の榮光に輝いた。そしてヴェヌスは、ほほえんで、かの女の愛の林檎に思いおよんだ。

（1）ヘルクレスは地獄の犬ツェルベルス（三頭蛇尾の怪物）を下界から連れてきた。テゾイス（超人的勇士、アテネの王）は、友ピリトウスが黄泉の女王ペルゼフォネを誘拐しようとしたとき、ピリトウスに從つて冥府に行つた。そして、ヘルクレスによつて救い出されたが、ピリトウスのほうは、下界の巖に鎖でつながれたまま殘された。――（2）ケオス生れのシモニデス（紀元前五五六年――四六八年）は、きわめて多方面な詩人で、ギリシャの寸鐵詩の大家であるが、かれについてツィツェロは次のように物語つている。あるときのこと、ユピターの双生兒カストルとポルクスを讃美した多くの詩句が含まれているシモニデスの詩にたいして、テッサリヤの支配者スコパスが褒賞金の半ばを留保した、シモニデスがこれを請求すると、カストルとポルクスとに訴えたらよかろう、といつた。すると、たちまちこの詩人に來訪を告げるものがあり、戸の前で二人の青年が聲高にかれによびかけていた。そして、とこうする間に、二人の姿は消えてしまつたものだからシモニデスはそれを探しに出かけた。すると、その廣間は、そこにいた他の人人の上に崩れ落ちてしまつた。――（3）古代人は檣頭電光をこのように説明していた。――（4）樂人オルフォイスのこと。

しかし、この光景もまた、何と速かに過ぎ去つていつたろう。老いた神神はその仕事に疲れ、かれらの精神は、死すべきものの間では、次第に吐息のように放散するようになつた。英雄たちの子孫は、わが身の起源を誇つてはいたが、それは、身につかぬ相續の特權にすぎなかつたので、いまやかれらは、他の死すべきものたちを抑壓するためにこれを濫用するにいたつた。かれらの血脈のうちに、神神の血の流れは緩漫となり、その代償としてかれらは、紋章と祖先とをもつてみずからを飾つた。すでにユピターは、パラスの智慧が、このたびは、はなはだしくかの女を迷わせてかかる瞞着におとしいれたというので、かの女を非難しようとしていた。そのときかの女は、じぶんがかつて與えたこともない忠言については

辯明することもせず、默默として地上に降り立ち、その仕事をみずから開始した。

7

すなわち、あらゆる神たち女神たちの間にあつて、パラスのみは、外部の接觸なしにユピターの頭に生じ、それ故にまた、直接に人間の魂にはたらきかけることができるという特權をもつていた。だから、死すべきものを教えるのに、何ら變裝する必要もなく、またなおさら、欺き誘惑する必要もなかつた。かの女はメルクルが貸そうとした笛を斥けた、ともかくそれは、いつも人間の心情よりむしろ耳にはたらきかけるものだつたから。それに反してかの女は、かの女の價値を認め、かの女の默默たる姿を愛していた篤学な人人の魂に直接わが心中をつたえた。かの女はピュタゴラス[1]に沈默と思考とを教えた。かの女はかれに、夢想によることなく、宇宙の諸原則を露わしでやり、かれの耳を開いて天體の調和をきかせた。靈感をうけたプラトーを導いて靈魂の國土に行き、かれに神神の國家や天國の愛[2]すらをみせてやつた。ブルトゥスとスツィピオとを、かの女の貫通し得ない楯で武裝してやり、祖國ばかりでなく德をも愛し、嫉妬を

賤しみ、嫉妬の蛇髪によつては、ただもつと偉大な德行へと誘われるという感情をかれらに注ぎ込んだ。[3]それ故に、かの女はその胸の上には（蛇髪の怪女）メドゥゼの頭をいただき、（復讐の女神）フリエには同じ場所に天國の美を與えたのである。かつて巨人どもを鎭壓したその飾らぬ槍をもつて、かの女は巖をうつた。するとそこから博愛の橄欖樹が生じた。かの女は、仇敵に勝利したものにではなく、人間への善行者に、しかし最も好んで、自己にうち克ち、自己と平和のうちに生きているものに、橄欖の平和な葉飾の冠をいただかせた。またかの女は、この褒償を與える際に、地位や性や年齢には何ら氣にかけるところがなかつた。[4]かの女はそれを奴隷エピクテトにも、攻圍された玉座の上に惱んでいたマルク・アウレル[5]にも、ひとしく與えた。かの女は、かれらの魂の內部に、天國の平和の油を注いで激情を鎭めてやつた。女性もまた、かの女の姉妹にも似た監視を遁れなかつた。かの女は、かれらのために外からではなく、かれらの心のうちに、活動と靜かな家庭內の勤勉との、あらゆる技を發明してやつた。ペネロペと共に、かの女は誠實の衣服[6]を織り、この待ち焦れる女の心を、その忍耐づよい希望の涙ではらしてやつた。かの女は、幾人かの高貴な女性

に、死をすら輕んずるように教えた。かの女はアリア[7]の手に懷劍を與え、ポルツィア[8]の炭を灼熱する神酒に變じた。しかし、かの女の最上の愛兒には、男女を問わず、かの女の像――純潔のパラス神像をあたえたのである。かの女は、いまや勝利者としてオリュンプスにあらわれたが、誇ろうともせず、いつもの控え目な沈默の偉大さを持していた。ユピターは、かの女が最大の功績をかち得た人類をかの女を與え、そしてかの女は、天國の一切の樂しみに代えて、地上をその靜かな親しい住居に選んだ。かの女は、熟慮し、また活動する賢者のもとに住むことを最も好み、良い教育や家庭的な活動的な生活の、もの靜かな幸福をたのしんだ。さてこれにたいして、落ちつきなく徘徊するヴェヌス[9]は、かの女を暗黑の夜の梟という象徴で嘲つたのであつたが、しかし運命自身は、その神意の唯一の、また最上の實行者としてのかの女に、もつと高貴な象徴――隱れた叡智の像であるスフィンクスを贈つた。

（1）ギリシャの賢者ピュタゴラス（紀元前約五八〇――五〇五）は、現象の諸原則を數、量、および調和の關係に歸し、中心の火をめぐつて調和的に廻り、かくして天体の音樂――天体調和を發生せしめる十個の神的天体を假定したが、かれは長い間その弟子たちに默默たる服從を義務として命じた。――（2）プラトー（紀元前四二七――三四七）は、目にみえる世界を、諸現象の背後にある理念の國土の曇つた反照だと考え、その「國家論」において理念にまで高められたギリシャ――ドーリアの國家制度の像を敍述した。そして、對話篇「フェドルス」のなかで、眞の愛を説明して、それは、魂が美を見て神的な故郷を想い起すことから、またそこへ歸りたいという憧憬の念から生ずるものとした。――（3）マルクス・ユニウス・ブルトゥス（紀元前八五――四二）が、市の高級裁判官に任ぜられたことでかれを妬んでいたガユス・カシウスによつて、ツェザルの生命を奪おうとする陰謀への參加に同意せしめられたとき、それは嫉妬から起つた行動ではなく共和國の自由にたいする熱狂から行われたのである。――兄のプブリウス・コルネリウス・スツィピオ（紀元前二三五年生れ）は紀元前一九〇年シリアのアンチオクス大王にたいする戰勝の後に、かれが參謀となつていたその弟と共に、かれらがシリア王から收賄したという訴訟をうけた。かれを妬む人人によつて起された訴訟に、かれの姓名の權威を對置してこれを穢すことを嫌つて、スツィピオは、そのとき自發的に南部イタリーのリテルヌム附近にあつた自己の領地に退きそこで紀元前一八三年追放のうちに死んだ。――（4）エピクテトス（紀元五〇年頃生る）は、ネロの寵臣であつたかれの主人から、その高貴勇敢な精神の故に解放せられ、その後ストア派の教義を學びこれを代表するに至つた。――（5）皇帝マルクス・アウレリウス（一六一――一八〇）は、十二卷の冥想錄を書いた。――（6）ホメールの「オデュッセー」のなかで、ペネロペは、遠國に漂泊する良人オデュッツイスに貞實であろうと決心し、おしよせる求婚者たちに條件として次のこ

とを示した。すなわち、かの女がかれらの一人と結婚する前に、舅のラエルテスのために經帷子を織ることを許してもらいたいというのだつた。そして、かの女が一日中に仕終えたものを夜になるとまたほどいてしまつた。――(7)ローマの貴人ツェツィナ・ペトゥスの妻。夫が謀反の故をもつて紀元四二年皇帝クラウディウスにより死罪の判決をうけ、みずから進んで死ぬという決心がつかず動搖していたとき、アリアはまずみずから懷劍を胸につきさし、それを夫に手渡して言つた「ペトゥス、痛くありませんよ。」と。――(8)ウチカのマルクス・ポルツィウス・カトの娘、ツェザルの殺害者マルクス・ユニウス・ブルトゥス（註3參照）の妻。かの女は紀元前四二年フィリッピ附近で夫が死んだという報知に接し、赤熱する炭を嚥下して自殺した。――(9)蓮葉女の女神としてのVenus vulgivaga（淫蕩なヴェヌス）。

おお、偉大な女神よ、あなたの國土にはなお、ただ地上のそこここに、暗黑につつまれているところがありますそれが間もなく、遍ねく光明ある國土となりますように。

＊

ミネルヴ

1

ミネルヴの控え目な態度にもかかわらず、かの女は間もなくすべての女神たちを敵にしてしまつた。というのは、オリュンプにおいても、嫉妬が一般の女性的德性だということだから。「まあ、ごらんなさいよ、」とかれらはいつた、「あの、ただ獨り賢い女を。あのひとは、わたしたちの仲間を避けるのです。わたしたちと話をすると沽券にかかわると思つているのね。そして、いつたい獨りのときは何をしているのでしよう。たぶんあのひとの梟とでもお話しているのでしようか。」

ミネルヴは謙遜に歩み出て、かの女の新しく美しい發明である織物を示した。「姉妹たち、ごらんなさい、」とかの女は言つた、「わたしのひまつぶしが何だか。靜かな有益な仕事です。わたしの心と手とがつくりだした技は、人間の衣服、人間の飾りになるでしよう。わたしの同性は、ここちよく働くでしよう、そして男たちを、ひまな戀愛のあらゆる網の目よりも、むしろ勤勉のきずなで一そうかたくひきつけ、自分の胸に保つてゆくでしよう。いつたい、あなたがたもそうお考えにならないの、有益な發明の意味深い思想は、ただ一つでも、おしやべりやたいくつな遊戯のすべてに勝つて、限りなく快いものだと。」

かの女は、その孤獨へかえつていつた。そしてもは

ヘルダーの「パラミュティエン」

や、怠惰な、仕事をもたぬ人人の嫉妬の蔭口には、それ以上氣にかけなかつた。

2

抑えられた女神たちは、もう一つの攻撃の準備をした。「すくなくとも明白にわかることは、」とかれらは言つた、「ミネルヴが戀愛の役にたたぬということです。そしてまた、どうして役にたつことができましよう、あのひとは、わたしたちの老いたお父さんの冷い腦髓から創られたのではありませんか。あのひとの心臓は鼓動することがないのです、あのひとの心も思想にすぎないのですから。情愛の抱擁から流れ出た熱情が、あのひとの血脈にはたぎつていないのです。尊敬されるのなら、させておきましよう。役に立つというのなら、そうさせておきましよう。あのひとが人氣ものになり、求められ、愛されることは、決してありますまい。しかも、一切を幸せにする甘美な戀愛にまさるものがありましようか。」

神神の父は、かれの娘のうちに分たれている自分自身の味方をした。かれは言つた、「おまえたちは、わたしの頭の生命の液が、ひとしくわたしの心臓から湧き出たのではないと思つているのか。ほかならぬわたしの心臓が、いとも精醇なその液を用意したのではなかつたか。——それからさらに、何と愚かしくもおまえたちは、眞實に神を崇敬することが愛なしに行われ、また、愛が崇敬なしに生ずると妄想しているではないか。出かけていつて、ミネルヴの男女の愛兒たちすべてに、そのことを訊ねてごらん。かれらは、浮薄なアモルの與える移り氣な百の贈もののためにおまえたちを愛するよりは、ミネルヴが與えるただ一つの智慧の賜もののためにかの女をずつと心から深く愛しているのだ。

殊に、泡から生れた娘(1)よ、おまえだが、わたしはおまえをずいぶん愛してはいるが、おまえの起源とおまえの日日の運命とを想い起すがよいぞ。」——かれは口をつぐんだ。しかし女神たちや神神は、かれがそれをもつて何を言おうとしていたかを感得していた。

(1) アプロディテ（ヴェヌス）・アナデュオメネ（「浮上れるもの」）のこと。かの女は海の泡から生じたという。

至醇な愛は高貴な智慧であり、最高の智慧だけが最も効果あり最も不變な愛を生む。

3

ヴェヌスは第三の攻撃の準備をしていた。「だけれど、」とかの女は言つた「一つのことについては、事は疑いもなく決定的です。あのひととわたしとの美しさについては・パリス、[1]あの公平で粋なパリスは、わたしたちの兩人とも見たのだわ。」

(1)プリアムスの息子パリスが、イダ山上で、父の羊群の番をしていたとき、ヘラ(ユノ)、パラス・アテネ(ミネルヴ)、およびアフロディテ(ヴェヌス)の三女神がかれのところに來て、決定を求めた。すなわち、ペロイスと不和の女神エリスのテティスとの結婚式の際に、集つた人人の間に「最も美しき人に」と銘記した林檎が投げこまれたが、かれら三人のうちだれにこの林檎はふさわしいかというのだつた。その際、アフロディテだけが、その美しさを全部かれの前に露わしたので、審判者として懇請されたパリスの心をひいた。

「パリスですつて」とユノが言葉をはさんだ、「あの不公平な粗野な羊飼ですか。おまえは、かれの判斷と、おまえがかれを迷わせた[1]あのくさりはてた誘惑とを、お恥じでないの。」

(1) 前註を參照。

「爭うのは止めましよう、神神の女王さま、」とかの女は言つた、「昔の話は忘れましよう、そしてただあの僭越な愚かな女に一致して反對しましよう、あのひとはあなたにもわたしにも害になるのですよ。あのひとがわたしのように美しい髪をもつているなら、あの兜をかぶつてそれを隱すでしようか。あなたの誇らかな胸と、あなたもご存じ[1]のわたしの魔の腰帶とがあのひとにあるなら、あのきゆうくつな鎧を選ぶでしようか。わたしたちは、あらためてパリスの前へゆきましよう。けれども、ひとりひとりでなく、みんな一緒に、そして、みんな裸で。」

(1) ホメールの「イリアス」で、ヘラは、ギリシャ人を援けるために、トロヤ人とギリシャ人との戰鬪からツォイスの注意を他に轉ずる。すなわち、かの女がアフロディテの「賢者をも魅する」腰帶をみずから卷いてやることに依つて。

「お默り、」とユピターが言つた、「そして、おまえたちの徒らな迷妄の故に神神や人間たちにたつぷり厄介をかけたことのある(不和の女神)エリスを、ふたたびむら氣のために激昂させてはいけない。わたしの娘に間違いがあつたとすれば、それは、おまえと一緒にそのような審判者の前で爭いごとに加わつたからなのだ。このたびだけ、そしてまさしくおまえたち女性の心の最も傷み

ヘルダーの「パラミュティエン」

易い點でのみ、あの娘は女の弱點を示したのだ。さてまた、あれがおまえの髪をもたず、おまえの淫蕩な姿態をもたぬと仮定して――あれは、それを欲しがるだろうか。それを要求するだろうか。あれは、裸のおまえが見る目美しく光り輝こうと、情事にふけろうと、そのままにしておく。そしてまた淑やかに、その否むことのできぬ・わたしだけが知つている・魅力をあらわすことはないのだ。」

4

智慧の女神は地上にあらわれた。そしてそれ以後、すべての婦人たちは、智慧の女神になろうと望んだ。かれらは考えた、「これほど容易なことがあろうか、梟のついた女神の兜をわたしたちは頭にのせる、そしてこれを美しくして、羽毛飾のついた男帽のようにする。女神の鎧を限りなく飾つて、いともほつそりと美しい胸當になるようにする。最後に、そのメドゥゼの像は、わたしたちの胸の上に、わたしたちの会話のうちに燦然と輝くようにしよう――わたしたちは、高慢な競争者たちにたいする勝利以外のことについては語らないようにするのだ。智慧の女神の權化となるのに、」とかの女らは語つた、「わたしたちに何の欠けるところがありましようか。」

「ほんの少々だけ、」とミネルヴの梟がこたえた、「すなわち、これらすべてのパラス的武装の背後に、一個のパラスが住むということだけが欠けています。わたしの羽毛はあなたがたには貸しませんよ。あなたがたは、みずからそれをはずかしめるでしよう。あなたがたを飾るのは、高慢な孔雀でなければなりません。あなたがたの胸甲をアモルがいたわることは決してありません。あなたがたは、注意深く自分でそれを結びあわせ、アモルの矢がいたるところに割目をみつけるようにするのです。最後にメドゥゼの顔は――ほんとに注意をなさつたがよい。パラスが怒つて、すでに眞似をした一人の女、アラハネ[1]にたいして行つたことがあるように、あなたがたがなりたくないもの、それだけにしばしばあなたがたの本來の姿でもあるものに、生きながら變えてしまわれないように。」

(1)リディア人イドモンの娘アラハネは、織物の術をはじめてアテネから學んだが、傲慢にも女神に挑戰し、神神の戀愛事件を織物に畫き、侮辱された女神によつて、刑罰として蛛蜘に變ぜられた（オヴィド「メタモルフォーゼン」第六卷、

第五句以下)。

「あなたがたがミネルヴに從おうとするなら、」とまじめな梟が言葉をつぎけた、「引籠つて活動するわが女王ミネルヴの追隨者たろうとするなら、女神が男の槍を棄てたときに最も好む家庭の道具、これをあげましょう。」——梟はかの女らに、ミネルヴの發明であり神寶である紡錘を渡そうとした——すると、すべての婦人たちは、まじめで醜い梟から逃げ去つた。

5

金次第の流行女教師が、一人の若い娘に、道義と作法を訓育することになつた。かの女はその授業を次のように始めた。

「ねえ、何よりもまず、どの女神さまも怒らせてはなりません。ひとりひとりの女神にふさわしい奉仕と奉仕の流儀とをゆるがせにしてはいけません。最も勢力があり最も愛されている三女神がだれか知つていますね、ヴェヌス、ユノ、それにパラスです。ヴェヌスの奉仕から始めなさい。ヴェヌスは青春の友であり、伴侶ですから。青春は長くは續きません、そしてそれと共に——悲しいことに——ヴェヌスの、いと美しい賜ものも、わたしたちを見捨てるのです。それの想い出のために、ごらん、ここにヴェヌスの鏡と林檎とがあります。——年齢が長ずるにつれ、おまえはおのずとユノの奉仕に入つてゆくでしょう。おまえの、花咲く美しさに欠けているところを、華美によつて補おうと努めることができます。そして、華美がおまえに與えることのできぬものは、大膽と高慢とが與えてくれましょう。このことの紀念のために、女神の孔雀の美しい尾をとつておまえの頭にさし、將來の勝利に備えなさい。——ついに、孤獨なしわの多い老年が來れば、それは、ミネルヴの姿をよそおう時です。ミネルヴの德やその功績、しかし特にその眞劍で嚴格な清淨さを模倣しなさい、さすればおまえは——」

突然部屋がユピターの電光によつて燃え上り、かれらの前には崇高な・高貴な怒をいだく・パラスが立つていた。「誘惑者よ、」とかの女は叫んで、その青い、鋭く光る眼で女教師を見た。「おまえは、このように恥しらずにわたしの名を汚すのか。おまえの隱している本體になりなさい。」誘惑者は即座に、パラスの鋭く輝くまなざしによつて姿を變え、おそるべきメドゥゼになつた。かの女の面相はフリエになり、かの女の髪は舌を吐く蛇とな

つて鎌首をもたげた。少女はおどろき恐れたが、親切なパラスは、かの女を情愛深く膝の上にだき上げて、言つた、「愛する少女よ、恐れてはいけません。わたしは誘惑者になんら害を加えたのではないのです。あの女は、わたしの輝く胸甲のうちに自分の姿を眺めたのです、この胸甲の前では、どんな偽もどんな變裝も存續することができません、そこで、あの女も、本來の姿をあらわさねばならなかつたのです。無邪氣な子よ、あの女を信じてはいけません。わたしの奉仕の第一の德は、處女の貞淑と純潔です。おまえの生涯の最も美しい歳月を下賤な放蕩で過したなら、どうしておまえはミネルヴの娘になることができましよう。わたしはただ、靜かな勤勉、華美のない謙遜、家庭的な誠實と素朴をのみ要求し、これらにのみ榮冠を授けます。孔雀の華美とユノの高慢とが、どうしてそれらと調和し、それらの德に導くことができましようか。最後に、わたしの最高の贈ものは、試練を經た親和、靜かな眞實です。フリエはおまえを誘つて、醜い不純な虚僞をもつてわたしの姿を模倣し、智慧の名をあらゆる名のうちで極惡のものにする女に仕立てようとしたのです。――おまえの目をフリエから轉じ、わたしの殿堂についておいで。」

家庭的なパラスは、若い少女を教育し、富やユノのような華美な贈ものなしに、かの女を仕立てた。女神の姿、アテネ像の守本尊一つが、そのすべての嫁入仕度であつた。そして、婿の貧しい小屋の附近には、一本の美しい橄欖が芽生えた。守本尊はかの女の日日の鏡となり、有益な平和な橄欖樹は、かの女の貧しいが幸福な結婚生活の象徴となつた。

――――*――――